

令和 6 年度

看護学部FD研究会報告書



自治医科大学 看護学部FD 評価実施委員会

## 2024 年度 看護学部 FD 研究会報告書

1. 日時:2025 年 3 月 11 日(火)9:00～12:00
2. テーマ:「学生のアクティブ・ラーニングを支える具体的な教育方略の探求—看護基礎教育における ICT 利活用のさらなる促進を目指して—」
3. 対象:看護学部全教員、臨時教員、ティーチングアシスタント(TA)  
※臨時教員、TA は講義のみ参加(会場参加ないしは後日動画視聴)
4. 本研究会の目的:昨年度の FD 研究会では、「学生のアクティブ・ラーニングを推進するための ICT の利活用」をテーマに、アクティブ・ラーニング推進のためのインストラクショナルデザインや看護基礎教育における ICT 活用の変遷等を学び、教育場面における課題を明確化およびそれら様々な課題を解決するためのアイデアの共有ができた。本年度は、昨年度で得た知見をもとに、各授業科目における課題解決のためのアイデアの具現化に向けて、アクティブ・ラーニングを推進するための ICT の利活用の実際例を学び、具体的な教育方略の検討を行った。

## 5. プログラム

時間	プログラム	担当
9:00～9:10	開会挨拶・講師紹介	FD 評価実施委員長
9:10～10:10 (60 分)	講義	大阪公立大学 教授 真嶋由貴恵 先生
10:10～10:20	休憩・席移動	
10:20～11:05 (45分)	グループ討議 「授業科目の目的・目標達成に向けた ICT 利活用の促進」 ① 前回研究会から今までの取組み(予定含む)の共有 ② 取組みを促進するための具体策の検討	
11:05～11:50 (45 分)	グループ討議結果の共有(1 グループ1分程度)・意見交換	
11:50～12:00	総評	小原 看護学部長
12:00	閉会・アンケート記入	FD 評価実施委員長

## 6. 当日参加者数

教員:43 名 / 45 名 (95.6%) 臨時教員:3 名 / 6 名 (50.0%) TA:1 名 / 1 名 (100.0%)

※ 当日参加できなかった対象者には、年度末までに講演動画の視聴を案内した。

## 7. 研究会全体の進行状況および概要

前半の講義では、真嶋由貴恵先生から、各授業科目におけるアイデアの具現化に向けて、アクティブ・ラーニングを推進するための ICT の利活用の実例をあげて教授いただいた。後半のグループ討議では、各学科目の教員を 3～4 名の小グループに分け、他学科目と合わせ 6～7 名の混合グループ編成とし、前回研究会を踏まえた取り組みと取り組みを促進するための具体策について検討した。各グループの討議内容の概略はクラウド上のスプレッドシートに随時入力された。討議結果の共有の際、各グループの発表者は書き込んだスプレッドシートを参照しながら 1 グループ 1～2 分程度で討議結果を説明した(グループ討議の成果は別添資料参照)。その後、講義およびグループ討議に対する質疑応答の時間を設け、真嶋先生より御助言をいただいた。

## 8. アンケート結果

1) 回答者数:38 名 / 当日参加者 43 名 (回収率:88.4%)

## 2) 結果の概要

## ① プログラムについて

・「講義」について						(n=38)
	①満足	②やや満足	③どちらでもない	④やや不満	⑤不満	無回答
回答数	28	8	0	2	0	0
%	73.7%	21.1%	0.0%	5.3%	0.0%	0.0%
・「グループ討議」について						(n=38)
	①満足	②やや満足	③どちらでもない	④やや不満	⑤不満	無回答
回答数	27	9	0	2	0	0
%	71.1%	23.7%	0.0%	5.3%	0.0%	0.0%
・「グループ討議結果の共有」について						(n=38)
	①満足	②やや満足	③どちらでもない	④やや不満	⑤不満	無回答
回答数	23	13	1	1	0	0
%	60.5%	34.2%	2.6%	2.6%	0.0%	0.0%

## ② 時間配分について

・「講義」について						(n=38)
	①短い	②やや短い	③ちょうどよい	④やや長い	⑤長い	無回答
回答数	1	8	29	0	0	0
%	2.6%	21.1%	76.3%	0.0%	0.0%	0.0%
・「グループ討議」について						(n=38)
	①短い	②やや短い	③ちょうどよい	④やや長い	⑤長い	無回答
回答数	0	6	32	0	0	0
%	0.0%	15.8%	84.2%	0.0%	0.0%	0.0%
・「グループ討議内容の共有」について						(n=38)
	①短い	②やや短い	③ちょうどよい	④やや長い	⑤長い	無回答
回答数	0	2	35	1	0	0
%	0.0%	5.3%	92.1%	2.6%	0.0%	0.0%

## ③ 今後の FD 活動への有益性

	①そう思う	②まあそう思う	③どちらとも言えない	④あまりそう思わない	⑤そう思わない	(n=38) 無回答
回答数	26	8	2	1	0	1
%	68.4%	21.1%	5.3%	2.6%	0.0%	2.6%

## ④ 企画に関する意見や感想

- ・ 他領域の先生方の取り組みが共有されてとても参考になった
- ・ ICT を教育にどう活用していくか、具体的に理解できて勉強になった
- ・ グループワークでは他領域で工夫している点を知ることができ、たいへん学びになった
- ・ 改めて学生の能動的な学習のために、どんな ICT が活用できるか考える機会となった
- ・ 他領域の情報を聞け、勉強になった。真嶋先生の内容もとても新鮮で刺激的で、教員としてもう一歩ふみだし時代の流れに合わせ、学生に合わせ変えていくことの大切さを知った
- ・ 学生の多様性を考えたときに ICT を利活用していくことが必要になってくることを実感した
- ・ 他領域の具体的な ICT の活用方法が知れ、明日から使えそうなものもあり学びになった
- ・ ICT の利活用の工夫は、教員の創意と予算が必要だと思った
- ・ 看護技術の内省システムと暗黙知の形式知化についての話がとても分かりやすく良かった。ICT 活用の変遷の歴史は昨年もお聞きしたので、その分最近のことを詳しく聞きたかった
- ・ 各領域の取り組みを知り、自領域に活かしていきたいと思った。こういった機会があるだけでありがたい。時代に合わせて学生のために ICT 化できないか考えていくことも大切だと感じた
- ・ 記録の電子化に関する情報が役立ち、今後検討してみたい

## ⑤ 次回以降のテーマや企画等についての要望

- ・ 各領域の ICT 利活用に関しては有意義な情報共有であるので引き続き行ってもらいたい
- ・ 臨床知のテーマで愛媛大学医学部附属病院の内藤知佐子先生がおすすめです
- ・ システムや教材の開発という大がかりなこと、今すでにあるものをどう活用するかという小さな ICT 活用があると思うが、後者の方を特に取り上げて欲しい
- ・ 他大学FDに参加し、教員間で授業参観をしてアクティブ・ラーニングの検討をしていると知った。そういった取り組みは若手教員にとってもよいと思った

## 9. 評価

## 1) 目的達成状況

講義では、講師がこれまでに開発されたアクティブ・ラーニングを支えるデジタルツールの開発背景を学ぶとともに、具体的教育方略について学習者、教育者それぞれの効果を含めて理解を深めることができた。また、グループ討議を通じて、教育現場におけるデジタルツールの活用状況や具体的な実践例を共有するとともに、教育活動の場面を想定した教育方略を検討した。その結果、特に学内演習や臨地実習において、課題の提出や情報共有に関して ICT を活用できる可能性が確認できた。さらに、グループ討議後の発表や意見交換において、各学科目担当の授業科目における ICT のさらなる活用は、本学部における教育の質を向上させるものであるとの認識を共有できた。

以上から、各授業科目におけるアイデアの具現化に向けて、アクティブ・ラーニングを推進するための ICT の

利活用の実例を学び、具体的な教育方略を検討するという本会の目的は達成できた。また、アンケートの結果によると対象者の満足度は高く、今後の FD 活動に有益であったとする反応が大多数であることから、本会の成果を次年度以降、各学科目において具現化していくことが期待される。

## 2) 今後の課題

本研究会においては、2年にわたり看護基礎教育における ICT 利活用のさらなる促進を目指して、本看護学部における学生のアクティブ・ラーニングを支える具体的な教育方略の検討を行ってきた。次年度からは、得られた知見を具現化することを目標とし、実際の取り組みに関する評価を行っていくこととする。

以上

2024年度 看護学部FD研究会 グループ討議概要

G	前回研究会から今までの取組み（予定含む）	取組みを促進するための具体策	グループ 教員名
1	<p>【精神看護学】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Moodleなどを使い、授業の課題や実習施設のホームページ、関連する動画などコンテンツの掲示などは以前から行っている。</li> <li>・ 今年度より、精神保健看護実習の臨地実習の日数が一日増え、これまで学内実習に含まれていた演習を行う時間がなくなってしまったため、タブレットシートを使用して後日共有できるようにした。用紙を印刷する必要がない、教員の手間が省けたという点では良かった。</li> </ul> <p>【地域看護学】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Moodle、グーグルドライブ、Teamsを選択できるようにしている。何を使用するかは、担当教員と学生で合意をとりそれぞれ活用している。</li> <li>・ アクティブラーニングというよりも、教員の管理という点で、オンライン上での課題提出とした。実施してみた結果、学生間で課題の修正や教員コメントを共有しながら進められるようになった。</li> <li>・ 前回研究会にでた話題として、同時期に課題が出されることに学生から意見があり、いつ課題が出されるか可視化されるものがあると全教員で共有できる。どんな時期にどんなことを学生が取り組んでいるのか教員も分かるとよい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ICTを活用する対象の学生として、どんな学生を対象とするか検討が必要。教員のエフォートをどこに向けるか</li> <li>・ 近年の学生の傾向として一度の説明で理解できない学生が目立つ。何度も説明が必要であれば、講義動画や実習オリエンテーションの動画などをMoodleにあげ活用してみる。</li> </ul>	<p>半澤教授 永井教授 塚本教授 島田准教授 青木講師 地神助教</p>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Teamsに課題を出してもらってそれを各教員が添削して返却した</li> <li>・ 動画をTeamsに貼り付けていつでも学生が確認できるようにした</li> <li>・ Moodle上でだとルーブリックの評価やコメントもでき、学生も見られる</li> <li>・ Moodleにword文章を提出するとコピペのチェックもできる</li> <li>・ 修正部分の比較ができる、ポジティブFBができる</li> <li>・ 実習中もグループごとにTeams作成し連絡している</li> <li>・ グループワークの課題を共有しながら修正できる、「必ず一回はコメントすること」など積極的を促す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Teamsの方がMoodleよりもグループワークはしやすい、会議もできる</li> <li>・ 評価や最終提出はMoodleを使用する</li> <li>・ 演習のペーパーベイスメントであればアセスメントはPCでもよいのではないか</li> <li>・ タイムリーな共有が指導者や教員、学生で行えればそれぞれの齟齬なくなる（が、指導者がTeamsに入ってもらうのは難しい）</li> <li>・ 助産は助産師の特技と学生の手技を二つ並べて比較してもらうのもよい（会陰保護のベクトルや力の入れ具合を数値化したものもある）</li> <li>・ 訪問時、学生とベテランの視野を比較する研究もマルチビデオラーニングシステムなどを取り入れていけると良い</li> </ul>	<p>春山教授 川野教授 市川講師 谷田部講師 二宮助教</p>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生がイメージできるように映像を授業に活用する→準備性を高める</li> <li>・ 学生のモチベーションを維持するためのアクティブラーニング</li> <li>・ Moodle上での事前課題に取り組んでもらうことで、演習での理解を促進する取り組み（事前課題にも配点を持たせることで、学生としての成果？の意味を持たせる）</li> <li>・ 学生だけの学習は間違いに気が付かない・訂正がされないことがある→対比させてわかるようにする</li> <li>・ 実践場面を動画撮影しデブリーフィングを行う講義構成にしたが、時間的に難しさがああり、教員が教授媒体になっていた。学生がじっくり動画を見て、自己の実践を振り返るのは難しかった。</li> <li>・ 動画を撮って振り返るとしても、取り上げたい場面や気づいてほしいところがどこか焦点をあてないと気づいてほしいところがぶれてしまう可能性がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 視覚的に手順を比較して手順の理解はできるかもしれないが、根拠の理解まではつながらない可能性があるため、AIを活用して根拠まで述べてもらうようなシステムを活用できないか</li> <li>・ 術直後など型が決まっている手順などであれば映像媒体などの活用は可能かもしれない</li> <li>・ 学生自身が視覚的に進度/到達度がわかるようにする→自分事として捉えられるようなツールをつくる</li> <li>・ 学生が自ら取り組みたいと思えるようなツールの活用（自分が積み上げてきたものが見えるようなものが必要）</li> <li>・ 事例の看護過程であれば、AIに採点をお願いできるようにならないか（教員の負担軽減も含めて）</li> </ul>	<p>小原教授 長谷川教授 石井准教授 古島准教授 大串助教 小川助教</p>

2024年度 看護学部FD研究会 グループ討議概要

G	前回研究会から今までの取組み（予定含む）	取組みを促進するための具体策	グループ 教員名
4	<p>・学生のレポートの引用文献、引用の資料をリストアップしている。</p> <p>→学生が2年生の後学期の時点で情報収集能力の状態を把握している。成績と原著文献を利用している比率に関係がありそう。⇒アクティブラーニングとの関連性は？引用資料で自分用のデータベースとなることを期待している</p> <p>Eポートフォリオ：自分の学習履歴を共有することで、学習者間での共有や教員の学習者の理解の促進が期待できる</p> <p>・学生のリアクションを知るためにアンケート等を活用していきたい。</p> <p>・患者の語りを学生が聞き、学生同士で聞く語りのロールプレイを行った。</p> <p>→学生の興味関心の向上、動機付けがはかれた。</p> <p>・予習復習を行えるよう、動画をMoodle上に掲載した。</p> <p>・授業が終わったあと、Moodle上に授業教材を掲載した。</p> <p>→1年生7～8割閲覧している。3回目以降は学生からの掲載の希望あったため掲載したが閲覧率が5割下がった、しかしテスト前に閲覧率が急上昇した。</p> <p>・授業コマの目的</p> <p>・特定行為はe-learningを活用している。</p> <p>・周術期看護の演習で、事前に、学生が本来の一連の実践の流れ（模範例）をみれると学習を深めたり確かめようとするきっかけになるかと思う。</p> <p>・スキルの習得にはデジタルツールの活用が有効か</p> <p>・総合セミナーにて学生同士が進捗状況の共有を行うことも有効</p>	<p>・現在はアクティブラーニングの導入の段階といえる。</p> <p>・学生に提出してもらった課題等を活用し、学生が学習に対して能動的に参加できるようにするための工夫を行うことが大切である。</p> <p>・学生が能動的に学習するをどのように評価するか</p> <p>・学生同士の相互評価をICTを使用し実施することは有効。ただ時間がかかるため、工夫が必要。</p> <p>・アクティブラーニングが効果的なものと効果の期待が難しいものを分別することが重要である。</p> <p>・アウトカムが短期的なものや長期的なものがある。知識は短期評価であるが、姿勢・態度は長期評価となる。</p> <p>・事前事後課題としてテスト</p> <p>・学習者が能動的に誘導による能動性を</p> <p>・アクティブラーニングの評価指標の難しさ</p> <p>・ICTを使用して授業や評価の時間を短くすることが期待できる。</p>	<p>村上教授 倉科教授 佐藤准教授 関山准教授 渡邊講師 石井助教</p>
5	<p>・模型を活用して、理解を促している。触覚を活用することも有効だと思うが実現はしていない</p> <p>→将来的にはVRを活用したい</p> <p>・学生のグループごとに自分の興味関心のあることを調べて（英語で）発表する授業を行っている</p> <p>→AIの患者で学生が個別に英会話ができるプログラムを取り入れてみたい</p> <p>・学生が発言できるように授業中であてている。質問が合っていれば学生の自信になることもある。文章を読んだり発言するのが苦手という学生に配慮が必要な場合もある（アンケートなどに訴えあり）</p> <p>・学習者のICTリテラシーやデバイスに合わせて、使い方などのフォローに労力が割かれることがある</p> <p>・教員とはではなく、学習者どうしでの質問や悩みなどのやり取りを活性化したい。学習者が共通して困っていることや質問が整理されるので教員も反応しやすい？</p>	<p>・学生は特に、発言が正しいかを気にしたり、失敗体験を恐れる傾向にある。</p> <p>→ICTを活用して自分だけではなく他の人も同じ失敗、疑問があるとわかれば、いいのでは？どんな形であっても体験をしてもらうためには...？</p> <p>→アバターの使用などで匿名化を可能にすると、失敗しても恥ずかしくない！（教員は誰がどれか分かるようにしておく）</p> <p>・声を出すのが苦手、コミュニケーションが苦手、という学生は増えてくるのではないかと？多様な学生が増えていくことが想定される</p> <p>→看護職という職に就くのであれば、生身でのコミュニケーションは必須。</p> <p>→やはりトレーニングは必要になるので、AIやアバターなどの活用はトレーニングとして有効かもしれない。実際の患者と接するまでに、SPなどを活用して段階的に進められる</p> <p>・ただし、AIで学習者とのやり取りがある程度できるのであれば、教員が指導する意義は何かを考えていかなければならない。</p> <p>・自分の学習方法の傾向（見る・聞く・書く・動く）を知って学習方法を学習者自身が選択することも方略として取り入れることも有効か？</p>	<p>大塚教授 平尾准教授 八木准教授 鹿野講師 佐々木講師 村松助教</p>

2024年度 看護学部FD研究会 グループ討議概要

G	前回研究会から今までの取組み（予定含む）	取組みを促進するための具体策	グループ 教員名
6	<p>・ Teamsで課題の提出を実施し、全教員が同時に確認してコメントを入れられるようにしている。特に助産は夜間実習があり、実習状況も含めて教員・学生が情報共有できるように有効活用している。(母)</p> <p>・ 分娩介助の実際の動画も撮影している。(母)</p> <p>・ 老年の場合は、多施設で行っているが、オンラインなどを使用したくても施設の状況(控室、Wi-Fiなどの関係)で難しい。(母)</p> <p>・ 電子書籍の場合、各領域の使用する出版社をそろえなければならないのかもしれない。</p> <p>・ Eラーニング、電子教科書の学習効果への疑問</p> <p>・ アクティブラーニングとしてはMoodleで演習の事前学習を課している。(老)演習の時間を有効的に活用できる。ICTの導入というよりコロナがきっかけではある。(老)</p> <p>・ 母性は紙媒体での演習テキストの穴埋めを事前学習にしている。QRコードもいれ、動画を見てこられるようにしている。(母)</p> <p>・ 連絡手段としてのSNS。母性ではLINEワークスを導入。私用との区別。</p> <p>・ 実際の臨床で目にするもの(例えば拘縮など)と、学内で行う演習では差を感じる学生もあり、演習でリアルを表現できるように工夫している。(老)</p> <p>・ 実習のカンファレンスで、学会のポスターのように壁にグループでまとめた用紙(サマリー)をはって発表し、グループ間の学びを共有している。(老) 作成の時間も設けている。座るカンファレンスではなく、自分たちで動いて聞きに行く形式。</p> <p>→今までは紙媒体だったが、学会のようなポスターを作成できるようにし、今後のデジタルツールを使って発表する能力をつけていけるとよい</p>	<p>・ 自己学習の内省としてICTの活用をしていけると良い。</p> <p>・ 学生の主体性を引き出すためにも、方法の工夫が必要。</p> <p>・ 他大学だとクイズ形式など行っている。</p> <p>・ 学会ではその場でグーグルフォームに入力し、集計をすぐに実施見せていた。</p> <p>・ 実習で学生が学んできた事例を動画で再現し、別のグループに共有する。教員が作るばかりではなく、学生に主体的に行うのも良いかも。</p> <p>・ 教員もどのような設備が整っているのか、手段や方法を勉強していく必要がある。</p>	<p>浜端教授 角川教授 川上准教授 上野講師 長田助教 前田助教</p>
7	<p>〈Moodleでのレポートの提出〉 演習のレポートをMoodleで提出できるようにした。 利点： ・ 学生は学校に来なくても提出できる ・ 教員は学生の登校スケジュールを気にせず提出期日を設定できる 欠点： ・ 印刷し、紙媒体のものにコメントするため、評価は紙媒体になる ・ 設定された枠組みの中で記載するため、これまで紙媒体で提出していたほどの充実した内容にならないことがある 〈Teamsでのリアルタイム指導〉 演習にTeamsでグループを作成し、学生間のやり取りをリアルタイムで学生が見られるようにした。 具体的な取り組みとして、演習中の災害対策をあらかじめTeams上のチャットで意見を出し合って共有した。 意見を出し合う期間をある程度設定した。 利点： ・ 教員が間でコメントをしながら、軌道修正できた。これまではメールや電話で行っていたため、教員の作業効率もあがった。 ・ 前半の情報を後半の学生が見られる 欠点： ・ あらかじめ学生にTeamsを設定させる必要があったので、使用機器の容量不足で困る学生がいた ・ 全学生に情報共有されるので、不必要な情報を受けることになった学生もいた 〈事前学習で映像教材を用いる〉 演習前に映像教材を見ることを課し、演習では復習の位置づけで映像を見るように組み立てた。 利点： ・ あらかじめ映像教材を見て演習に臨んだ学生にとっては、反転学習になる 欠点： ・ 一定数、映像続教材を見ない学生がいる ・ 学生のログを確認することで視聴を促せるが、それを確認するための教員の作業量が多くなる 〈Teamsで共同ファイルを利用した教員間の情報共有〉</p>	<p>・ 学習管理システムを用いてレポート等を提出した場合、それを蓄積して管理してもらうことで学生の学習効果を高める仕組みを構築する（現状では、Moodle上のデータは容量に限られる中で削除されてしまう）</p> <p>・ Moodleの他の学科での使用方法を共有により、ノウハウの蓄積をしていく</p> <p>・ 技術のチェックシステムの活用</p> <p>・ システム上で学生が実施したものをチェックできる（チェックする側の質の担保につながる）</p> <p>・ 対象のリアルに感じられるシミュレータ（声かけに対する反応がチャットで出る、人間らしい風貌）</p>	<p>内堀教授 田村准教授 井上講師 小西講師 飯島講師 高瀬助教 赤羽助教</p>